

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その2

世界の森林減少とその課題にせまる(2)

ーフィールドワークから考えるインドヒマラヤの魅力ー

長濱和代(東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士課程)

3月末に1か月のインドでの調査から戻ってきました。「なぜ、長濱さんは毎年インドの辺境地域へ行くの?」とよく聞かれます(今回の原稿依頼は、その問いから始まった)。そこでまずは「博士論文を仕上げ、博士を取得するためです。」と答えます。博士論文を書くという名目があるから、毎年、インドヒマラヤへ行くことができますが、もし行けなくなったとしたら、自分は生きる力をなくすほどに、悲しみに暮れるでしょう。こう考えると、私は「好んで辺境へ赴く、通常とは違う感覚のヒト」と言えるのかもしれませんが。また同時に、「辺境」には「通常」とは異なる魅力があるとも言えそうです。前者なのか、後者なのか、それとも他にも要因があるのか、自分のインドヒマラヤでのフィールドワークを通じて、その魅力を整理してみました。

1. 豊かな自然

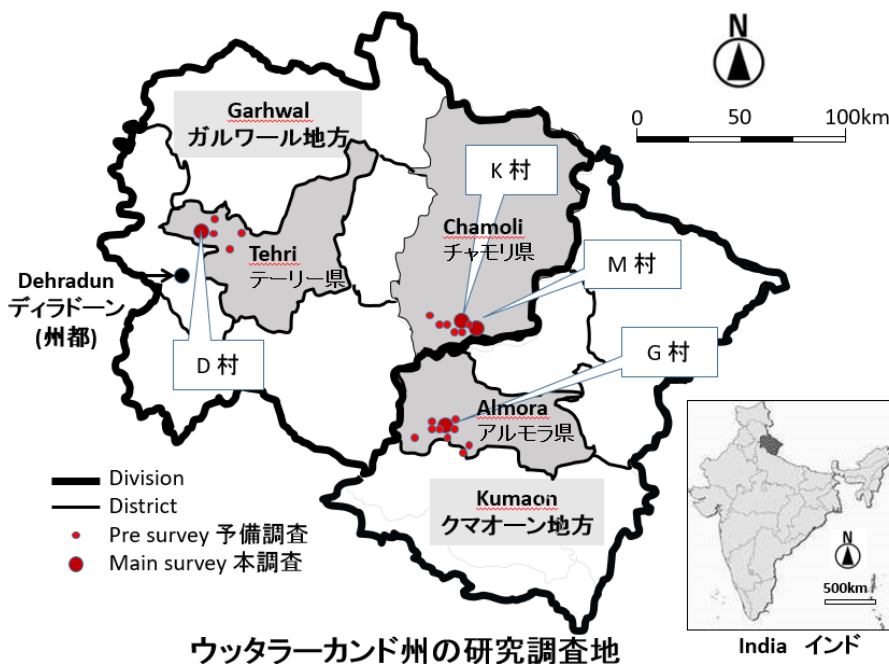
ヒマラヤには美しい自然が残っています。

山村での生活では、早朝から鳥のさえずりが聞こえます。何種類の野鳥が鳴いているのかわからない複重奏なので、種数を調べて、その同定を試みようと思いました。毎年、訪れる機会のある国立GBP環境開発研究所の研究者に聞くと、「このハンドブックが役に立つ」テキストをいただきました。開けば、州内には100種類以上の野鳥が確認され、年間を通じて80種が研究機関の周辺に飛来することでした。バードウォッチャーにとって魅力的な場所だと思えます。また植物においても同様に種は多様で、この地域では今世紀に入ってから新たな種が見つかるそうです。

科学者にとっても、新奇性を高めるための魅力的なフィールドであると考えます。



「活着いる」里山(2013年インド・ウッタラーカンド州)



夜間に明るくない場所に立つと、闇が暗くて怖いと感じます。同時に見上げる星に感動し、首が痛くなるか、冬場では寒さに我慢できなくなるまで、空を見上げています。

人が入って良く管理された森も美しいと思います。生活のために人が林地に入って、燃料の小枝を取集し、飼料(家畜の餌)を利用している林地では、まるで生きているような「活動する里山林」が見られます。50年くらい前までの日本でも、こんな風に森が利用されていたのではないかと、想像がかき立てられます。これぞ「活着いる」里山だ!と言えます。

2. 研究テーマの魅力

「持続可能な木質バイオマス・エネルギーを使い、林地の活性化を図るためのフロンティア的（最先端の）*）暮らしをしている人々がいる！」

ケニアだけでなく全世界に、また身近なアジア諸国でそうした国や地域がいくつもあることを知るようになったのは、筑波大学の増田美沙先生の院生ゼミに参加し、研究を通じて世界各国の事例を学ぶようになったことが契機でした。

各国と異なるインドの特徴としては、1) 経済的に発展を遂げながら森林被覆率が増加していること、2) 木質バイオマス、いわゆる薪炭材を燃料として利用せざるをえない暮らしをする人々がヒマラヤ山麓

の中山間地域にかなりの割合で存在していること、また 3) 森林を村落住民により共同で管理する JFM (Joint Forest Management: 森林共同管理) という制度が 1990 年以降導入されていることです。これらを知ったことで、インドヒマラヤの森林とそこで暮らす中山間地域の人々に興味を持つようになりました。

特に北部ウッタラーカンド州には国家森林調査機関 (FSI) があり、イギリス植民地統治期から、イギリス統治国による政府高官のための森林学校が存在していました。そのため統計資料が充実していたことや、JFM の先駆と言われる VP (Van Panchayat: 森林パンチャヤト: 森林管理の住民自治組織) が 1930 年代に制度として認められていました。それを知った私は、直感的に「この研究は歴史的にも制度的にも、そしてフィールドワーク的にも面白い！」と考え、大学院で調査研究を始めました。

【問：なぜヒマラヤ山麓では、木質バイオマス・エネルギーが必要とされるのか？】

ウッタラーカンド州はインド北部に位置し、州の北部から東部にかけては 7000m 級のヒマラヤ山脈をかかえるフロンティア (辺境) *）で、急峻な中山間地域 (標高 3000 メートル余りの森林限界まで) に多くの村落が存在すること、そして州の森林被覆率が 6 割以上あり、多くの森林資源に恵まれていることが主たる要因として挙げられます。このことは、イギリスの植民地による支配の始まりが 1800 年代後半以降と、平野部と比較して遅かったことにも表れています。

でもみなさんは、電気を通して、プロパンガスが中山間部の山村へ運んで利用することができるなら、山へたきぎ焚き木を取りに行ってお飯を炊くよりも、家電製品やガスを使って調理する方が便利だと思いませんか。

地域では、(生計維持のために)、森で焚き木を拾って燃料に使うのは無料なので、経済的な負担がかかりませ



収集した小枝を燃料にするVP(森林パンチャヤト)の前リーダー (2018年 ウッタラーカンド州 テーリー・ガルワール県)

せん。特に BPL 世帯 (Below Poverty Line: 1 日国際的には 1 日 2 ドル以下で生活している世帯、さらに低く 1.2 ドルで算出している統計もある) では、お金を節約するために、ガスや電気を保有していても、それらの利用はできる限り抑えることを心がける多くの世帯を観察できます。会社員や公務員の割合は低く、州における 8 割の世帯は小規模の農家で、自給自足的な暮らしをしています。こうした世帯では、収入源は政府から受託するわずかな金額の村落向上のための活動です。今年 3 月、州内 D 村への 1 週間の滞在中には、日曜を除く毎日、午前と午後の約 3 時間ずつ、村民が道を舗装している光景を目にしました (左写真)。



村落活動: コンクリートを流して道をつくる (2018年 D村)

3. 森で生活する女性のたくましさ

森と暮らす女性のたくましさの仕事ぶりに、私はいつも感動を覚えます。彼女らは早朝（朝日が出た後）起きてすぐに、家畜小屋から子どものように可愛がっている牛や山羊たちを外へ出して飼い葉を与えると、家の掃除をしてから朝食を作り、食事をしながら家族と交流をします。昼間は畑仕事の他に昼と晩の食事の支度、午前と夕方に飼い葉の収集、近くの泉へ飲料水の水くみ、薪の収集など、晩まで仕事が続きます。またわずかな休息時には、自分がチャイを飲む時に居候の私の分まで作ってくれる等、目配りと気配りはすばらしいと思いました。



外の仕事から離れて、つかの間の休息(2018年D村にて)

道路の補修の村落活動では（2 ページ目の写真）、土でできた道に石を敷いてコンクリートで固め、道の整備をするのに、男性ではなく女性たちが多く賑やかに集まっていたので、なぜこうした力仕事に男性が積極的に取り組まないのかしら？と聞けば、「女性は何でもできて有能だから」と冗談を交えて答えてくれました。ヒマラヤ山麓の多くの世帯では、男性が都市や海外へ働きに出ている場合が多く、政府からお金がもらえる村落活動は、家にいる女性が参加するケースも多いようです。

ヒマラヤの魅力は、自然や人や食べ物、また伝統の技など、他にもまだまだたくさんあるのですが、ここで紙面が尽きてしまったので、次号へ続くとさせていただきます。（第3回へ続く）

【脚注】

＊）フロンティアには、「最先端」という意味の他に「辺境」という意味もあります。ちなみに自分の所属している新領域創成科学研究科は、英語で Frontier Sciences（フロンティア・サイエンス）と訳されています。



テーリーガルワール県D村での質問紙を用いた面談調査
(2018年 筆者は左端)